慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大名・ 太郎冠者の變貌
Sub Title	Historical changes of Daimyo (大名) and Tarokaja (太郎冠者) : two stylized characters, the master and the servant, in the "Comic Interlude" (狂言) of the Noh drama
Author	太田, 次男(Ota, Tsugio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.1 (1957. 7) ,p.34- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570700-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大名・太郎冠者の變貌

太田次男

一、天正狂言本に於ける大明
二、大名狂言から小名狂言へ
三、狂言に於ける昔話の變質

一

能狂言の諷刺が特に階層的立場から論ぜられる場合には、主從關係にある、大名・小名及び太郎冠者などが先づ取上げられるのであるが、とりわけ、太郎冠者などにみられる、從者側の際立つた活躍ぶりから、彼等に共通の特徴乃至は地盤を認めて、近時太郎冠者階級といふ言葉なども屢々使用されるやうになつた。

これは以前よく論ぜられた方式であるが、太郎冠者にみられる、時には怜悧であり、或は遲鈍ではあるが愛嬌に滿ちてゐるかと思へば、また時として頗る教養があるといふやうな、作の內容により樣々に異る性格や行爲等を徒に羅列して、このやうな要素をすべて兼ね備へたものが、卽ち太郎冠者であるとするのも、(1) 結局は餘り意味のないことであるし、從者階層の解明には些も資する所はないのであるが、さりとて、太郎冠者階級といふ言葉に示されるやうに、社會的階層や外的環境の方から能狂言が論ぜられる場合には、立論の基礎ともなるべき、テキストの精査に時として充分の用意

に缺けることなども見受けられ、やゝ不安を懷かせる。

いふまでもなく、現存の能狂言詞章が、その發生當初よりかなり時代の降つてゐるものであることから、その復原的操作には種々の困難が伴ひ、[2]これ迄の成果も未だ決して充分であるとはいへないが、唯、笹野堅氏の大藏虎明本に關する學問的功績は、最早贅言を要しないことであるし、更に、これ亦同氏により既に早く發見され、この度（昭和卅一年）漸く飜刻された天正狂言本は、その系統や變化過程上の位置などに就て、尙多くの不明の點を殘してゐるけれども、虎明本に比較しても、それ以上に古い俤を數多く見出し得るのであり、確に貴重な資料といつてよいと思ふ。[3]

然しこの本の系統上の疑點から、その內容をそのまゝ、何の顧慮もなしに、大藏虎寬本、同虎明本、天正本と順に遡及的に考察の對象にするには、未だ幾分不安もあるし、又その記述が上演に際してのメモを思はせる位に、殆ど作の大筋だけに過ぎない程度であり、從つて內部にまで深く考察をすゝめる爲の資料としては決して充分なものとはいへないが、謂はゞその骨組である形態や、或は登場人物などについては、これまでの諸本には未だ見當らない要素を數多く含んでゐる。そこで先づ天正本に於ける主從物の形態や登場人物の動きなどについて、若干の考察を加へてみよう。

いま「附子」をみると、そこに出るワキは從來の諸本では、大名（虎明本）であることも小名（虎寬本）である場合もあるが、天正本では、これが坊主になつてゐる。[4]このやうな變化については後述するが、說話との關聯なども當然考慮される必要があり、兎に角問題の發端になると思ふのであるが、諸本と異る登場人物について、更に目につくのは、大明（天正本特有の大名の宛字）が現はれて、後の諸本ではすべて太郎冠者が呼出される個所で、その代りに女が登場するといふことである。この女も勿論從者としてである。このことに就て或は、既に太郎冠者が女の登場前に呼出され

てゐて、改めて女が呼ばれるのを省略した形にして、簡單に記述したに過ぎないとも考へ得ようが、然し、

一、大明出て、竹松とゆふ女をよびいだす、神事のとうが、當た程にとて、のふのだふぐかりにやる。おぢの所よりかりて來る（下略）

といふ「竹松」のこの記述と、これは最初から女は全然姿を見せずに、これまでのものと同じく太郎冠者がでることになつてゐる「鬼松風」の、

一、大明一人出て人をよび出し、神事ののふをせんとて、のふのだふぐかりにやる。さておぢの所よりかりてくる。（下略）

とでは殆んど同じ記述形式になつてゐる上に、「竹松」で太郎冠者の代りに女が出ることは少しも不自然ではないし、又筋の運びの上からみても、この女はおしまひの方で、自分を襲ふ追剝の首をしめるといふ役を持つてゐるので、若しこの場合、はじめから終まで、實際には何の働きもしない太郎冠者が呼出されて登場したとしても、最後の引込みがつかなくなる外はないであらう。

同じく女が呼出されるもう一つの例は、「いとより」（「お茶の水」の原形といはれる）であるが、現行の「お茶の水」（大藏流では集狂言）では、住持が出て先づ新發意を呼出し、水汲みにやらうとするが、應じないので止むなく寺の門前のいちや（女）がやられる。こゝでは新發意もたゞ呼出されるだけではなく、後で水汲みの場所でいちやと會ふことになつてゐるので、登場するだけの意味は實質的にも充分にあるわけだが、天正本ではこれとはやゝ筋が違ひ、

一、大明出て女をよび出す。ちん客ある、御茶申べし。一本杉の水くみにやる。（中略）いすぎて水汲みて歸る。

どんじや（道者？）一人出て、ことばをかくる。〻さま〻せれふ。後くつでおつころばす。とめ。

とあつて、この場合でも、「竹松」と同じく新發意ははじめから全然登場しないし、又水汲み場で女が會ふのは別の男になつてゐる。從つて小僧がはじめに現れ、改めて女が呼出されるといふよりも、女がはじめから住持に呼出される方が遙かに自然ではないかと思はれる。

又、これはその特徴として既に述べたことがあるが、(5)天正本全體を通じて、諸本にはみられない場面――酒盛や舞など――に女が登場することが割合に多く、或は他本では男と爭つて敗ける樣な場合に、逆に女の方が勝つといふことなどもあつて、この本特有の女の活潑な動きをも併せ考へれば、太郎冠者の代りに女が呼出されることがあつても、決してそれ程唐突なことではなく、寧ろ充分に有り得ることゝみてよいと思ふ。たゞこの場合、大名・太郎冠者といふ固定した主從關係の中にある大名と、女を呼出すことの出來た大名とでは、假令同じ言葉であるにしても、各々の變化段階上の差異は當然認められよう。作中に、これ程女が自由に出沒することが出來たことについては、勿論女藝人の活躍をも考慮に入れなくてはならないであらうが、それが太郎冠者にとつて代れる位であるところに、矢張固定以前の生々とした古い姿を認めてよいのではなからうか。又大名といふ字の代りに天正本ではすべて大明と書かれてゐるのも、或はかういふ古い姿を無意識の裡に表はしてゐるともいひ得ないであらうか。

更に、筋や形式が殆んど同じでゐて、そのシテとワキの人物が共に種々變化し得る例として、例へば「末ひろがり」では、

一、大明出て人をよび出す。都へ行て、いかにもたかひ末ひろがりかふてこよとゆふ。さてのぼる。都につきてよば

はる。〽たらし一人出て、さし笠をうる。もしせうはら立ば、はやし物。〽御笠山〳〵、人が笠をさすならば、我も笠をささうよ。とおしゆる。くだる。しうこれ見てはらをたつる。おつぱしらかす。其時はやし物。しううかるゝ。もろともにおどる。ふへとめ。

となつてゐるのに對して、もう一方の「松山鏡」（現行「鏡男」の原形）は、

一、女一人出て、おつとをよび出し、下人をもたぬとゆふて、都へ人を買ひにやる。のぼる。人かわふとよばはる。たらし一人出て鏡をうる。かうてくだる。都の人はきやく心とて、まづ門に立ておく。さてかくといふ。女よろこびて見に行。女見てはら立る。おうぢ行て見て、おふぢをかつてきたとゆふてはら立る。後、三つれを見て、女よ、男よ、おふぢよ。後はふへにてはやす。鏡とりて歸る。

とあつて、兩曲はシテ・ワキの役柄の違ひの外にも、尚幾分の相違はあるにしても、兎に角同型に屬するものとみてもよいであらう。勿論それだからといつて、「松山鏡」の女とその夫とを、直ちに「末ひろがり」の大名と太郎冠者とに夫々置換へることなどは性急に過ぎようが、庶民に古くから親しまれてきた昔話である「松山鏡」[6]を、斷片としてではなく、大筋をそのまゝとり入れてあるこの作の方が、恐らくは一段と古い姿を示してゐるものゝやうであり、（昔話に就ては三章參照）さうすれば、後には次第に庶民から離れたものになる大名狂言なども、その原流に迄到れば遙かに古風な、より親しみ易いものであつたのではないかとも推測されるのである。

かうみてくると、「麻生」に於ける下人達が、太郎冠者、次郎冠者といふ固定した役柄で呼ばれずに、藤六、下六と直接本人の名で呼ばれてゐることや、或は和泉流・「狂言集成」所收の「靱猿」で、シテが「隱れもない射手です」[7]と

名乘りを上げてゐるのなども、たゞ單に後になつて、名乘りに變化を求める爲の試みの一つとみるよりは、寧ろ名乘り形式の固定以前の古い形の尙遺存するものとみてよいであらう。時の經過と共に、名乘りは次第に登場人物の舞臺姿の實際とはかけ離れて、劃一化されてゆくのである。

以上のことだけでも、大・小名狂言が現行のものに固定するまでには、多くの點についてかなり著しい變化の迹がみられやうが、更に天正本と虎明・虎寬兩本の主從物――大・小名狂言を含み、それは更に主をシテとするものと、從者をシテとするものに分れる――などの比較考察によつて、この變化の迹を掘下げ、さらに愚か大名の古い姿や、これまで從者層から出たとみられる諷刺の實體と、その移り變りを解明してゆくことにしよう。

註

(1) 野上豐一郎氏『太郎冠者』。尙、これに對する批判として武智鐵二氏「太郎冠者について」(「能」昭24・7)がある。

(2) 能狂言詞章の整理現況に就ては、古川久氏「狂言の資料」(「文藝研究」昭和25・6)など參照。

(3) 朝日新聞社刊、日本古典全書『狂言集』(下)所載、表章氏の天正狂言本の解說、及び同氏「『天正狂言本』について」(「文學」24卷・7)參照。尙この寫本の奧書に「天正六年七月吉日」とあることから、この本を天正狂言本、或は天正本と呼ぶことになつたが、日附の實否に關しては未だ疑があるといはれ、從つて年號と內容とは必ずしも一致してゐるわけではないといはれる。

(4) 天正本ではワキとして「ばうず」が出てゐるので、「二人よび出す」とある場合、その二人を小僧とみなしてよいであらう。大名が出る場合でも、從者を太郎冠者とはつきり書いてあることもあるが、單に人となつてゐることも度々ある。

(5) 拙稿、書評「天正狂言本」(「史學」29卷・2)參照。

(6) この昔話の原型が『雜譬喩經』にあることは既に早く越原富雄氏により指摘されてゐるが(「鄕土研究」二ノ八)、『日本昔話名彙』によれば、この話は岩手、福島、新潟、岐阜、德島、長崎の諸縣に分布してをり、又南方熊楠氏によれば、(「鄕土研究」三ノ一)パーキンスのライフ、オブ、アビシニアにも類話があるといはれ、諸氏により近くは朝鮮、シナにも亦類話のあることが明に

されてゐる。

（7）天正本では、大明が太郎冠者を呼出し、「今日は鹿がりに行、したく申せ。さてかりに出る。何いき物がな、門出いわはんとゆふ。」とあつて、大明といつても、その實内容は寧ろ射手に近い上に、「門出いわはん」などをみると、後の猿引への難題もそれ程唐突ではないし、集成本とも略同じである。それが虎明本になると、「この邊りに住居致す大名でござる。」と名乗り、「今日は一段の天氣じゃ程に、野遊びに參らふ。」とあつて、やゝ狩と遠ざかる。虎寛本もこれと略同じで、「をん國にかくれもない大名です。」「……野遊山に出うと存る。」とあるが、同書の書入れに「弓を左へかたけ矢を右にかい込」とあつて、明に狩姿である。これと略同じものが「狂言記」（外編）所載の繪にもみられ、その詞章も、「八幡大名。」、「今日は遊山に出う。」となつてゐて、大藏流と大差はない。つまり舞臺に上るシテの姿は古くから、ほゞ射手の姿に變りはないが、本當の射手から、次第にさういふ服裝をした大名といふ様に變つてきたと思はれる。

二

先づ、天正本にみえる大明（名）のもつ實内容から檢討しよう。

この語について、表章氏は飜刻本の頭註で大名の宛字と註されてゐるが、はつきりさう斷定してもよいか否か、やゝ疑念が殘る。勿論他に同じ用語例があるか、尚今後の調査を要することであるが、よしそれと同じものがないにしても、少なくとも能狂言に於て最も重要な役柄の一つが、未だ一定した文字で書かれてゐないことは、假令宛字とか誤字とかいふ、偶然によることもありうるにしても、更にその他に文字ではまだ充分に熟知されてゐない程、その語の意味内容が充分に固定してゐなかつた狀態を示すものとみてもよいのではなからうか。若しさうなれば、大明と、後の固定した意味での大名との間には、幾分なりとも内容上で相違があつてもよい筈である。

天正本に「ゆ立」（湯）といふ曲があつて、餘りにも民俗的色彩が濃い爲か、或は劇的に單純過ぎる爲かして、現行曲には勿論いづれの傳本にも既に見られないが、その筋は、

……かれいのごとく御ゆをあげんとゆふ。神主殿、又ねぎ殿へつかひやる。又みこ殿、たんはた殿、いづれへもやる。つれてくる。かまはなへる。火たく。み子舞過て、神主御へいおつとつて、ふしひろたより、〳〵、雲井にかよふつてもがな、〳〵、天の岩戸のことづてをせん。御へいだんなにいただかする。〻此さゝを、〳〵、手に〳〵以て參たり、〳〵、天の岩戸にことづてをせん。ふへの舞。後ゆをかかる。

といふのである。しかもこれが舞臺上で演ぜられる爲には、內容とは直接に關係のありさうにもない大明が先づ現れて、人（冠者）を呼び出すことから始められる必要があつた。

天正本では、大明がかういふ意味で登場する曲は他にもかなり多く、(1) 中には既に大藏流ではみられないものもあるが、そのうち「わかな」や「田うへ」などは、天正本の記載に於てすら大明も冠者も共に現はれないで、筋も全く省かれ、單に囃子の部分だけが殘されてゐるに過ぎないが、たゞそのうち「わかな」では、その中程にある囃子詞の間に「〻大明」といふ詞が挿入されてゐることから、元來ははじめに矢張大明が出るといふ、普通の形式に從つてゐたことが推測されるし、さうすれば類似の「田うへ」に就ても同じことがいへるであらう。和泉流・「狂言集成」所收の同曲では、大明の代りに神主が出てくる。場面からすれば、その方が餘程自然であるのに、それにも拘らず矢張大明が出なくてはならないところに問題がありはすまいか。

これは、大明の出現が藝能の本源に連なつて、本來神事と深いつながりを持つことを示唆するもののやうであるが、

更にこれと關聯して注意を要することは、大明がシテとして現れる場合には――天正本だけに殘つてゐる曲の中で――どんな場合でも必ず囃しを伴つてゐることである。そしてこれは、天正本に記載されると共に、虎明・虎寛本にも引繼がれてゐる曲（脇狂言の「すゑひろがり」、「麻生」、大名狂言の「今まいり」、「あはた口」、「うつぼざる」、「じせんせき」など）に就ても全く同様のことがいへる。と同時にそれとは逆に、虎明・虎寛兩本ともに大名狂言になつてゐて、しかもその曲中に囃しを含まないやうな曲は、天正本にはその該當曲は一つもみられない。つまり天正本で大明の出る曲は、どんな場合でも總て囃子や祝言詞を伴つてゐることがわかるのである。さうしてその祝言詞の中には、一見それらしくみえないものでも、舊くから祝言やほめ言葉として使用されてゐたらしいものもある。(2)

それからこれは大名とは直接關係のないものであるが、脇狂言の「三人夫」とか「筑紫の奥」などで、いづれも三人の百姓が出るところから、荒木良雄氏のいはれるやうに、(3) この三人を三番叟の翁に結びつけ、こゝに能狂言の源流を見出さうとする論に迄發展するのであるが、この場合にしても、三人の百姓が登場する前に大明が出るのではないかと推測し得る餘地が或はあるかも知れないのである。

「三人百姓」の類型では、普通先づ三人の百姓が出て、やがて奏者と問答する筋にほゞ固定してはゐるが、たゞ「狂言記」所收の「雁かりがね」や「松ゆづり葉」、和泉流の「こんぶ柿」（『古典文庫』三）などでは、三人の百姓の對話の前に、曲の劈頭に先づ奏者が出て、

某は、今日の御奏者でござる。何事も、御取次致さうと存ずる。（雁かりがね）

と名乘つてゐるのである。かういふ例を變化過程の一段階として頭に入れつゝ、天正本の「こけ松」の、

一、大明一人出て人を呼び出し、庭を立る、ひやくしやうにこけと松おあげよといゝつくる。さてあぐる。おそきとてしからるゝ。そうじや酒のまする。目出たふきりをまへといふ。さす枝の、木ずゑは若木の花の袖、〳〵、これはおひ木の神松の、千代にや〳〵をさゞれ石の、岩ほとなりてこけのむすまで、〳〵。松竹鶴かめの、ゆわひをさづくる此君の、行末守れと我がしんたくの、つげをしらする松風も梅も、さかふる春こそ目出けれ。

などをみれば、その何かたど〳〵しくて未整理のまゝであり、また幾分古型を存してゐるらしく思はれる點などからも、若しこの程度のもので、更に資料が集められるならば、或は大明の古い姿に對するもう少しはつきりした復原が行ひ得るのではないかと思ふのである。

「だいみよう」といふ名稱は既に平安時代にもみえるが、單に名田の大なる所有者といふやうな表面的な意味に止まらず、その言葉の使用を內面的に考察し、農村社會に於て如何にしてその使用が可能となり、更にそれが如何なる經過を辿つて狂言內に取入れられ、又実際に如何なる意味が附與されてゐたかなどについて、廣い視野から嚴密に究明を要することであり、筆者はこの大名と、宮座の年寄などとを關聯するものとして考へたいのであるが、(4) 少なくとも、天正本に現れた大明に關する限りでは、後のものに比べて遙かに宗教的色彩や祝言的要素をもち、また民俗藝能との關聯が示唆されるのである。さうして曲そのものも、はじめは囃しなどを中心に筋らしいものすら殆んどみられない程、極く單純なものであつたらしいが、虎明本以降では、筋も次第に複雜になり、從つて登場人物もその數を增してゆくと共に、その變化に應じ得ないほど、劇的要素の缺乏してゐるものや、元來劇的に餘り發展させる餘地のないものは次第に淘汰されたものと思はれる。

更に現行では、普通脇狂言と大名狂言とは一應分けられてゐるけれども、既に衆知の通り、もともとそれは便宜的分類に過ぎないものであり、その内容を吟味すればすぐに分るやうに、兩者は本來は一つのものであつたに違ひない。例へば形式の上だけからいつても、「麻生」などのやうに、虎明本では大名狂言に入りながら、それが虎寛本では脇狂言になつてゐて、然もその間にどれだけの變化があつて分類が變る程になつたか、それを見分けることは殆んど出來ないのである。とすれば、この邊の微妙な違ひは、實質的な内容上の相違といふよりは、脇狂言や大名狂言に對する、時代によつて變る感じ方や扱ひ方の違ひによるものと見做してよいであらう。つまり、元來脇狂言とか大名狂言とかいふ固定的な分類上の區別は行はれずに、いづれも祝言的色彩の濃い内容であつたものが、やがてその中から後の大名狂言に該當する曲が次第に分出して、やがて一つに纏つたものであらう。

そこで、次には祝言的狂言の一段階變化したものとして、大名狂言のうち、囃しや祝言詞、つまり脇狂言的要素を既に含まなくなつてゐるものを考察しよう。これに屬するものは一般的にみて、劇的にもやゝ進歩の跡がみられ、諷刺的要素も含まれ、若し大名狂言に就て諷刺が論ぜられる場合には、これ以降のものが引合ひに出されるものである。但しこの大部分が虎明本以下のものであつて、かういふものは天正本では未だ全くみられないことは充分注意される必要があり、又これが虎明・虎寛兩本以下になると、曲の異同、出入が全くみられなくなる點など、既にこれらの曲は虎明本の頃に大局的にみて固定してゐることを示してゐるのである。勿論兩本の内容を細かに比較すれば、未だ相當の差異もみられ、その中でも大名に對する笑ひ方の相違などは殊に著しい點である。

いまその違ひを比較しつゝその變化過程を考察しよう。先づ愚か大名の典型とみなされてゐる「萩大名」であるが、

その大名が愚か者として扱はれるやうになるのは、實は虎寛本のやうに比較的新しものになつてからのことであつて、少なくとも虎明本の段階では、特に際だつた愚行は未だ全くみられない。作のはじめの、小歌と和歌の混同についての大名・太郎冠者の問答なども、たゞ大名が和歌を知らないといふことを示すだけであつて、決してそれが直ちに無智、愚昧であることを意味してはゐない。さて、萩の庭に着いてからの二人の問答は、虎寛本では、

ヤイ太郎くはじや、あの嶋さきに見ゆる木は何じや。　あれは梅の古木さうに御座る。　何じや、こぶく。……

こちらの角に眞黒なものがよせかけて有る。あれは何じや。　あれは立石さうに御ざる。　何じや、たけ石。……

といふ風に、その都度大名の方が太郎冠者に窘められる様な爲體である。ところが虎明本ではこのやうな失態は殆んどなく、兎に角大名は一應體面を保てる程度の問答を交し、流石に文學的素養は殆んどみられないが、それでも乏しい語彙の中から一生懸命にほめ言葉をさがしてゐる有様がよくわかる。同じ個所でも、虎明本では、

扨〳〵見事かな、あの中なる木のまがりたる枝ハ見事じやな、……

あのすなハさて見事じやが、あれハりんごずなか、　あゝびんごずなでござる、……

あのはぎハやれ〳〵見事や、もハやかたハしハちりちりがたになつて、下におちて有るがなを見事で、せきハんなどちらひたやうすが、一口くふてミたひきびの有よ、

といふ工合で、教養を身につけてゐない田舎者が、懸命に努力するをかしさを示さうとする所に重點がみられる。つまり、虎明本での笑ひの焦點は決して大名の愚かさには合せられずに、氣眞面目なるが故に屢々犯す失敗に向けられてゐるのに反して、虎寛本では知識、素養のない大名を俎上にのせて、すべてを誇張しながら、よつてたかつて散々に嘲笑

するかのやうにみえる。しかもその笑ひの性格は寧ろ知的な都會風なものであつて、必ずしも下層からの大名など上流の者に對する諷刺であるとは受取れない性質のものである。

又、「秀句傘」では兩本それ程著しい相違はないが、

……おの〳〵、よりあふせられて、ひとこと仰られてハどつとわらひ〳〵させらるゝが、あれハなに事ぞ……あれハしうくこと事と申て、各のおなぐさみに仰らるゝ事でござるが、今までごぞんじござなひか、　いやさやうの事ハしらず、身共が身のうへをわらハせらるゝかと思ふてきびがハるかつたが、さやうでハなひよな。（虎明本）

などによつても示されるやうに、こゝでも秀句、輕口などの素養に缺けてゐることが先づ指摘され、やがてそれを契機として同じく一種の知的笑ひが展開されるのであり、恐らくこの場合も、本當に笑ひ得る者は素朴な農民達ではなく、かなり時代の降つてからの都市生活者とみるのが自然であらう。(5)

或は「きんや」にみられる大名は、後の虎寛本では、禁野に指定されてゐる野原で勝手に狩をする無法者になつてゐて、結局土地の暴れ者におどされる始末であるが、虎明本では逆に、スツパの方が無法者、亂暴者として扱はれ、その土地の名はきんやであつても、

そのきんやハむかしの事、われらもしらぬでハない……。

とあるやうに、現在は最早禁獵區域ではない。つまり虎明本では、スツパが昔の故事を楯にとつて無理に難題をふつかけてくるわけで、大名はその被害者でこそあれ、決して無法者などではない。これに反して虎寛本では、昔の故事を現在もそのまゝ生きてゐるものとして、逆に大名を法を犯す不逞大名に强ひて仕立てゝゐるのである。虎明本の大名はい

づれも、少なくとも充分世間に通用し得る程度であるのに、虎寛本では大名をどうにかして、愚か者か悪者かに、無理矢理に作り上げなければ氣が濟まない樣にみえる。

また特に、大名の衒氣を示すものとしてよく引合ひに出される「今まいり」の、

遠國にかくれもない大名です。加樣に過を申せ共、召遣ふ者は唯一人で御座る。（虎寛本）

なども、單に體裁にのみ拘泥する大名への諷刺とばかりはいへないやうである。この一節とほゞ同じものが天正本にもあつて、それは、

らふ人を八千斗おかふ。すぎたとゆふ。五千人、三千人、千人、後一人になる。一人が千人にむかふ者をおかんとゆふ。……

となつてゐるが、この一節は決してこれだけで特に意味があるのではなく、この曲全體に漲る陽氣な輕口的調子の一部として、その中に入つてゐてこそ始めて意味もあり、面白さも分るのであり、大名の衒氣などとして取上げるにはおよそ懸離れた性質のものであつたに違ひない。それが何時の間にか、その部分のみ切離されて大名狂言に取入れられ、まことしやかに大名の衒氣にふりかへられてゐるに過ぎない。從つて高野博士がいはれる、

名だけは大名で、其の實力の伴はない、憐むべき弱者大名が在所にあつた。さうして領地の大半は奪ひ去られても、衒氣と横柄とだけは失はなかつた者が多く、狂言の大名や殿は實に此の手合であつた。（『日本演劇史』第一卷・四九三頁）

とあるやうな大名も、虎寛本より古く迄遡れば、これに該當するやうな者は殆んど見當らないのである。

更にもう一つ見逃し得ないことは、純情な大名とこれに相應はしい從者とによる、大名狂言に意外に多い泣き留めや

泣き場である。「うつぼ猿」で、猿引が猿の舟をこぐ動作をみて、「猿引なく。これを見てふびんとゆふて殿もなく。」（天正本）などは諸本ともほゞ同じであるが、命を助けられて、猿が禮をするのをみては、流石に大名も、「やれ〳〵やさしひ事じやな、命をたすかつたをうれしひと思ふ物じや。」（虎明本）といつて、しんみりしてしまふ。また「鬼がはら」の大名は、堂上のいかつい鬼がはらに國元の妻を思ひ出しては早くも泣き出すのであるが、太郎冠者に窘められて、「それもそうじや、めでたう何事もなふあハふに、いざさらハわらわう、」（虎明本）といつて、「咄笑（ドツトワラフ）」して留めになる。この謂はゞ泣き笑ひは「二千石」にもみられる。主が、これまで代々奉公してきた太郎冠者を手打ちにしようするが、太郎冠者に「こなたの直れ斬らふと仰られて、太刀をふり上させられた御手元が、御親父に能う似まして、いにしへがおもひだされてそれがあハれでほえまらする。」（同）といはれて、主も憐れを催して成敗することを止め、泣く泣く助けてやるが、最後に、「是ハ昔の物がたり、今のおりから涙のこぼるゝ事ハなひ、めでたひやうにわらふていなふ。」（同）とて留めになる。但しこの後に書入れがあつて、

と云て二人ながらわらふている。

といふのと、もう一つ、

又なきづめにもするなり。

ともあつて、既に虎明本の頃演じ方に二通りあつたことが分るが、このうちどちらの方が古いかをみる手がかりとして、「あはた口」をみると、大名が粟田口と自稱するスツパにたぶらかされて逃げられた時、「今のやつめハためしめにて有けるぞや……」、といつて「なひているなり」（虎明本）の後註として、

一、ナキヅメハフシン也、あゝなむさんほうしるひたりたらされたと云てわらひづめ至ごく、なむさんほうぬかれたやれ〳〵おかしひことかなわらふて入。

とあるのをみれば、泣き留めといふ古い形式から次第に笑ひ留めに移り變りゆく過程を迹づけることが出來よう。さうしてこゝにみえる笑ひは、いづれも一度は泣いた後の笑ひであつて、純情な涙に照れての無理な笑ひであつたりするやうに、單なる冷笑や輕口とは決して同日には論じられないものである。

このやうな推移をみてくると、大名狂言は初め脇狂言と未分化のまゝに祝言物として形成されたが、次第に宗教的要素などよりも娯樂的要素を增して、一つの型として大名狂言に成長したものと思はれる。然し乍ら、そこにみられる主從關係にしても、決して始から不自然のものであつたり、下剋上の色彩の强いものとは思はれないし、又少なくとも主人對奴隷といふ古代國家にみられる主從關係でもなく、人間的な上下關係の成立が示唆され、或はそれに向つての努力が現れてゐるのである。

ところが、これは恐らくは廣義での政治的顧慮の結果と思はれるが、脇狂言に出てくるのをも含めて、大名といふ言葉に特別な意識が働き、その爲脇狂言も新しく見直されると共に、大名狂言にみられる上下關係の中から生れる健康な笑ひも次第に追放されて、不健全な歪められた笑ひがこれに取つて代るやうになつてゆくのである。

虎明本の脇狂言は卅二曲であるが、その順序は「ゑびす大黑」を最初に置き、以下それ程意識的な排列の仕方はとられずに、「すゑひろがり」は十三番目に、「目近籠骨」、「三本の柱」は夫々十八、十九番目に置かれてゐるに過ぎない。ところが虎寛本ではこれとはかなり趣を異にし、先づ始めに大名の出る「末廣がり」を置き、次に同じく「目近」、そ

して三番目には、虎明本では大名狂言になつてゐる「麻生」をわざ〳〵順序を變へてこゝに並べ、更にその次に「三本柱」を置くといふやうに、いづれも大名の出る曲が特別扱ひにされてゐるかにみえる。これは恐らくは、大名狂言の質的變化に對應してゐると思はれるが、能狂言の主たる觀客に當る大名への顧慮が、能狂言の役柄としての大名に對する一種の重壓として働き、さういふ狀態が永らく續くうちに、作品內容やそれに對する態度などをも次第に變化させざるを得なくなつたものと推察されるのである。虎明本、「びしやもん」の註に、

御前にては、何（れ）もわき狂言は、つくばひて名乘。

とあるのも、この意味で注目すべきものであらう。

かうみてくると、次に脇狂言、大名狂言の變質の時期が問題になるが、これは次章に於て述べることにし、更に、大名狂言の變化と關聯して、冠者をシテとする所謂冠者物――大藏流の小名狂言と略同じ――の動きに目をやらう。

先づ一應便宜の爲に、冠者物を天正・虎明・虎寬の順に整理して表示すれば、次のやうになる。

曲名	天正本	虎明本	虎寬本	曲名	天正本	虎明本	虎寬本
隱れ笠	×	脇	脇	なりあがり	×	小	小
寶の槌	○	脇	脇	あかがり	×	小	小
よろひ	×	脇	脇	なはなひ	×	小	小
ふじまつ	○	大	大	きつねづか	○	小	小

竹生嶋參り	×	大	大	ち	ど	り	○	小	小	小	小	小	小	小	小
ぼう〳〵がしら	×	大	大	し	び	り	×	小	小	小	小	小	小	小	小
ぶ　あ　く	×	大	大	か	う	じ	○	小	小	小	小	小	小	小	小
ば　う　し　ば　り	○	大	小	さ	つ	く	わ	×	小	小	小	小	小	小	小
ぶ　す	○	大	小	く	ち	ま	ね	×	小	小	小	小	小	小	小
し　ん　ば　い	×	大	小	し	み	づ		○	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山
た　ち　ば　ひ	○	大	小	ぬ	け	が	ら	○	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山
す　あ　ふ　お　と　し	×	大	小	く	じ	ざ	い	に	ん	×	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山	鬼・山
ゐ　ぐ　ひ	○	集	小	ね	こ	ゐ				×	小	小	小	小	小
ひ　の　さ　け	×	大	集	な	る	こ				○	小	小	小	小	小
し　ど　う　ほ　う　が　く	×	小	小	な	ま	ぐ	さ	物		○	小	小	小	小	小
く　り　や　き	○	小	小	文		荷				○	小	小	小	小	小
ふ　ね　ふ　な	×	小	小	ど	ん	ご	む	さ	う	×	小	小	小	小	小
け　い　り　う	×	小	小	お	ひ	や	し			×	小	小	小	小	小
は　な　あ　ら　そ　ひ	×	小	小	く	ひ	か	人	か		×	小	小	小	小	小

かねのね	目次のみ	小	小	とくさ	○	×	×
そらうで	×	小	小	木のへ殿の申ぢやう	○	×	×
くらまいり	○	小	小	鬼松風	○	×	×

（註）脇は脇狂言、大は大名狂言、小は小名狂言、鬼・山は鬼山伏狂言、集は集狂言の夫々の略。
○印はその本に該當曲の含まれてゐることを示し、×印は含まれないことを示す。

これをみて先づ氣付くことは、虎明本の中の大名狂言は虎寛本でも同じく大名狂言であるか、若しくは小名狂言に變つてゐるかである。又虎明本で小名狂言になつてゐる曲は、虎寛本でも同じく總て小名狂言になつてゐて、この逆、つまり虎寛本になつてから大名狂言に變るものは一つもない。かういふ傾向は天正本の該當曲の變化を考慮に入れても全く變るところがなく、從つて一般的にみて、大名狂言から次第に小名狂言化する傾向がみられる。因みにこの變化を虎明、虎寛本の數的比較によつて示せば、次の通りである。

	脇	大名	小名	鬼・山	集	大名狂言の全曲に對する率	小名狂言の全曲に對する率
虎明本	3/41	10/41	24/41	3/41	1/41	25%	58%
虎寛本	3/34	4/34	23/34	3/34	1/34	11%	67%

これをみれば、すくなくとも大藏流に於ては、次第に小名狂言が優位を示すに至つてゐることは明である。

そこで先づ冠者物のうち、大名狂言から小名狂言の間を動いてゐるものゝ質的變化をみる爲に、虎明本では大名狂言であり、それが虎寛本では小名狂言に變つてゐる曲を取上げてみよう。それは圖をみてもわかるやうに五曲あるが、それらはいづれも曲中に囃子や祝言詞を伴はないか、よし含んでゐても、最早それ程の効果も意味ももたないかのいづれかであり、從つてそれが一曲の内容を左右し得なくなつてゐる點で共通してゐる。

「たちばひ」では、主從が北野の御手水の會へ參る途中で、立派な太刀をさした人に出逢ひ、從者は主の爲にその太刀を奪はうとするが、主は「此せいだうたゞしひ折からに、さやうの事してよからふか。」といつて止めるが、それも聞かずに、遂に餘り乘氣でない主をも承知させる。所が虎寛本ではこれとは逆に、「あの太刀を見よ。何と結構な太刀では無いか。……某もあの樣な太刀が望じやが。」と小名たる主自らが欲がるので、太郎冠者も止むなく奪ふ氣になる。主も心のどこかではむづかしいとも思ふが、太郎冠者に勵まされると忽ち「早う取て來い。」と又强氣になる。所が從者は結局仕損じた上に主から借りた刀までとられてしまふ。虎明本では、大名はこのことを簡單に窘めるに過ぎないが、虎寛本では、「あの腰の物は重代で、汝一人や二人にかゆるこしの物ではないゝやい。」と惜しがる。さうしてやつと二人で件の男を執へるが、いざ繩をかける段になつて、太郎冠者は周章てる餘り主を縛つて留めになる。この邊りは兩本略同じであり、また共に作中のどこにも囃子や謡ひ物は介在してゐない。たゞ、虎明本では大名が比較的冷靜であるのに、太郎冠者はお調子者で周章てた拍子に不意に主を縛るところにおかしみが感ぜられるのに對して、虎寛本では逆に大名が自分の勝手ばかりしか考へられない愚か者で、惡意からではないにしろ、下人に縛られるのが寧ろ觀者に小氣味よく感ぜられるところに、兩曲の大きな相異點がみられるのである。

これが「ばうしばり」になると、終りの部分に謡ひ物が入つてゐる。留守中二人の冠者が酒を盗んで飲むらしいので、主はこの度は二人ながら棒縛にして外出する。それでも二人は協力して自由の體になり、又いつものやうに酒を飲んで舞ふ。その際、天正本・虎明本・虎寛本いづれも大體同じ内容の謡ひを伴つてゐる。(6) やがて主が歸つてきてこの有様をみて、「せうかたなぬひておふ。にぐる。とめ。」（天正本）とあり、他本も大體これと同じである。

兎に角、ほゞ同傾向の曲の中で、「たちばひ」（「しんばい」も略同じ）などのやうに、謡ひ物の全く缺けてゐるものと、「ばうしばり」をはじめとして、「ぶす」や「すあふおとし」或は、「ひのさけ」など、途中か留めの部分に、小舞や謡ひ物を含んでゐる曲と二通りあることになるが、この二つの異同を比較する意味で、もう一度「たちばひ」に戻るが、若し假にこの曲に囃しや舞を入れ得るとすれば、憎い男を取逃してしまつた太郎冠者が最後に大名の氣持を和らげ和解する意味で、留めで謡ふなり舞ふなりする以外はないであらう。そこにその種の詞を入れたとすれば、脇狂言の「末廣がり」などとも餘り違ひのない構成になるかも知れないが、然し曲全體を見渡すとき、囃子や舞ひが曲の中心となつて、それに向つて筋が運ばれてきてゐる頃のものと違つて、劇的な發展とそれによる興味とだけで充分に獨立し得る迄になつてゐる爲に、實際には最早その必要がなく、從つて前記「ばうしばり」のやうに、囃しなどを含んでゐても、それが直接筋の發展に大きな役割を果し得ないものと結局は同じことになるのである。つまり、「すあふおとし」や「ひのさけ」などでは囃しがあるが、「末廣がり」の場合などとは違つて、それが最早主從の和解の鍵にはなり得ないし、又假令目出度い謡ひ物があつても、その爲に曲全體が祝言風になり目出度い留めになり得るわけでもなく、曾ての目出度い祝言詞もこゝでは最早何の力にもならずに、主人が冠者を追込むといふ破局で留めになるのである。

つまり大名狂言から小名狂言へと變化してゐる曲は、漸く謡ひや囃子或ひは舞などといふ、古來から強い拘束力を持ち續けてきた、謂はゞ民俗信仰に基く藝能的魔力から脱却して、新しい劇的發展のうちに今後の新しい方向を見出さうとする轉換の時期に到つてゐたとみてよいであらう。然し劇が本來の意味で持たうとする自由の時期は極めて短期間で終り、俗信的魔力は失はれても、眞の劇的發展を抑制する別の大きな壓力が、次第に强力にその上に加はつてくるのである。それに就ては別に述べよう。

次に、虎明本中の小名狂言（虎寛本と重複するもの）に就てのことになるが、その數は、前の表の通り十七曲である。筆者は、實はこの虎明本の小名狂言こそ、すべての點からみて能狂言の到達し得る最終の段階を示すものと思ふのであるが、そのことを明にする爲に虎寛本のそれとを比較し、それ以後に至つて如何に小名狂言が變質し、寧ろ墮落してゆくか、その過程を追求してみよう。

虎明本にみられる小名狂言の一典型として「あかゞり」を取上げると、主人は山一つ向ふの茶會に太郎冠者を連れて出掛け、途中で增水してゐる川にぶつかつたので、從者に瀨ぶみさせようとするが、「御存のごとく、すねにあかがりがきれてござる所で、水をみますれ共六こんへこたれてうづきまらするほどに、ましてやわたる事は中〳〵なりまらせぬ。」といつて主の言ひつけ通りにはしないので、伴が役に立たないとて主は立腹する。それでも冠者は「いやお手うちになさるゝ共ゑわたりまうすまひ。」と、きつぱりと辭る。この際太郎冠者は殊更横着を決め込んでゐるわけではなく、全くあかぎれの爲に止むを得なかつたのであらうし、一方主が立腹するのも、これ亦それ程亂暴とも思はれない。止むなく主は一策を案ずる。太郎冠者の歌上手はかねて聞き知つてはゐるものゝ、その程度を知らないので、寧ろ評判

倒れのことを期待しながら、あかゞりといふ題で連歌一首よんだら、自分が背負つてこの川を越えてやらうと提案する。從者は高慢に思はれまいとして神經を使つて、歌はいくらでも作るが、御主人に負はれることなどはとんでもないといひつゝも歌だけは早速詠むが、豫想以上の出來ばえに主は驚き、ついでにもう一首といふ。冠者はこゝでも再度、「あゝ歌ハいかほどなり共よみまらせうが、おハれまする事ハゑいたすまひ。」と强調して、飽迄も從者の分は越えようとしない。主人は心で今度は出ないだらうと思つて、「いや〳〵汝をおうでハない。哥をよませておうからハ天神をおいまらする心じや。」といつてまた詠ませると、今度もいゝのが出來てしまふ。然し歌は上手でも從者は從者だといふ意識が主の何處かにあるので、率直にその出來ばえを譽めることが出來ない。それでも約束なので仕方なく負はうするが、冠者はなほも頑强に辭退する。主もしまひには意地になつて、「くどひ事をいふ、おハれおれといふに。」と迄いへば、「あゝかたじけなひ、かまゐてわれらのおハれまらするでハ御ざなひ、是ハ天神を御おひなさるゝとおほしめせ。」とひたすら恐縮しながら、主の背中を三度いたゞいて漸く負はれる。そして背中に負はれながらも、「あゝそのすじハふかうござ有、ハまらせらるゝな、こなたがようござある、あゝ。」などと氣を配る。主は從者を背負つたものゝ、心中矢張面白くなく、口實を見付けては水中に落さうと思つて、詰まることを尙ほ期待しつゝ、水中でもう一首詠めといふが、それは主の期待を又も完全に裏切る結果となる。その結果は反つて主を感情的に爆發させ、「さりながら昔から今に至るまで、下人をしうがおふたためしハあるまひ。」といつて、有無をいはせずに川の中に落し、「あゝくつさめ〳〵。」で留めになるといふのである。

かういふテーマはこの外にも「くじざい人」などにもみられるが、このやうな主從間の心理の微妙な陰影が巧に描き

出されてゐることは、逆にいつて、既に正常な主従關係を前提としてこそはじめて可能なことであり、能狂言もこゝまで成長したといつてもよいであらう。

この曲では、虎明・虎寛兩本の相違は餘りみられないが、中には重點の置き方が全く違つてゐるものも少くない。その意味で「なはなひ」によつて、兩方を比較すれば、主人が友人（アド）との賭に負け、金錢はおろか從者までもとられてしまふ。主も流石に、「久しうせがれの時からつかふてかハひ事なれ共……」と悲しみ、その事を面と向つて從者にいへないまゝに、使ひといふことにして默つて友の所へやる。主人の友人でもある新主人に事情を聞いて太郎冠者は一切を了解するが、矢張悲しく、結局不貞腐つてそこでは全然働かうともしないので、もう一度舊主のもとへ戻される。虎明本ではこゝで、「かへりてきよくもなひとてからみいひ、なく。」とあり、更にこれに續いてまだ全然馴染めない新主の惡口をぼつ〳〵と吐き出すのである。この曲では、これまで永年續いてきた主從關係が、賭事などといふつまらない事により破棄されたことを悲しんでゐるところに重點が置かれてゐる。從つて虎明本では全體として、しんみりとした雰圍氣を漂はせてゐるのである。ところが虎寛本では、シテの悲しみには餘り觸れられずに、寧ろ派生的な新主の家の中や家族の惡口などが誇張して滑稽にいはれる所に焦點が合され、その個所が冗漫に續いてゐる。例へば、「釜の下ではいつ火を焚たまゝやら、蜘の巣ばかりで御ざつた。」とか、「扨又まづしい癖に夥敷い子供で御ざつて、いかさま、十二、三をかしらに致いて七、八人も御座らうか。」ともいひ、「あの子供にせびられう事成らば、百年の壽明も一時にちゞまる事で御ざる。」と惡口し、更に「奥の方から山鳩のうめく樣に、太郎くはじや〳〵と申て呼まするに依て、（中略）御内儀の出られまして御ざる。……物にたとへて申さば、鼠の尾ほども御座らうか、かへるの尾程もある髪を、

くる〳〵と卷いて頭上へとうど打上、扨又くらい所でけはいを被致たと見へまして、白い所も有り、黑い所もあり、是も物にたとへて申さば、はげ山へ霜の降かゝつた樣な、あゝ何共見苦しいつらで御座る。」などと惡しざまに罵るのであつて、主從關係の破局による悲しみといふ、肝心の點は全く無視されてしまふのである。

又シテである太郎冠者が率直に自分の意見を主人に向つて主張してこそ、それを契機として主從間に眞に明るい笑ひが生み出されるのに、そのシテの發言が次第に控目になり、その爲に失はれてゆく笑ひを補ふ爲に、無理に歪められた不自然な笑ひが作り出されることも少くはない。例へば「しびり」では、從者が夜分に突然遠路買物に行くことを命ぜられるが、

某が參るに及ばぬ事なれどもいな事を申さるゝ事じや、いや〳〵思案をいたすに、只今まいつたらハ、あれハ何時によらず、物を云付てもとゝのへてくるほどにと申て、重度も申付られならハ、めいわく致す、此度ハくるしからね共、後のためじや、何ぞさくびやういたひて參るまひ。

といつて假病を使ふ。かういふ理由が一應何人をも納得させればこそ、その假病にも同情と共感が湧き、從つて生々とした笑ひも生れるのであるが、虎寬本になるとたゞ單に、

參りとも無事を被仰付たが、何と致う。

と、太郎冠者の本當にいひたい點はすべて取除かれ、從つて主從關係そのものをテーマとすることから生れる興味は全く失はれる爲に、これに代つて重點は從者個人の言行に移らざるを得なくなり、横着者といふ個人的な事が誇張して描かれることになるのである。太郎冠者の數々の滑稽な行爲は虎寬本ではすべてこのやうに歪められたものであり、無理

に作り出された笑ひであることが多く、その意味で、太郎冠者像はこゝに本質的な變化を受けることになつた。

更に小名狂言のうち、虎明本にあつて後の虎寛本にはみえない曲も少々あるが、(7) 然しこれらはいづれも、他流のうちどこかに殘されてゐて、虎寛本にそのまゝではみられないでも、他曲に併合されてゐるとか、或は恐らく偶然に省かれたに過ぎないとかなどで、その事自體さして重大なことではない。

たゞ最後に、天正本を除いてはどの傳本にもみられない「木の(近衞)へ殿の申ぢやう」に就て一言觸れなくてはならない。何故ならば、この曲こそ中世農民の立場を最も鮮明に表明してゐるものであるといふ論が、相當多いやうに思ふからである。先づその本文は、

一、一人出て、目屋(目安のことか)を以て、木のへ殿へ參。そうじや、此へ殿に御めにかくる。木のへ殿こしかけにて見る。一いどのじやう。さて又はた又おりがたし。つかひの立事、わくのてをくるがごとし。人かずうせてむらさびし。大家小かとなる。けめいたえて其あかつきをしらず。千草たねをつくして、春のわか草もへ出ず。世の中は月にむら雲花に風、木のへ殿にはさいもんのでう。文を引さき、はら立て、さへもんのでうをたちにておひ入。とめ。

といふのであつて、表章氏もいはれるやうに、(8) 表面的にみれば、一應『看聞御記』の「公家人疲勞事」にみられるよりも、一層露骨な表現のやうでもある。然し乍ら、この內容から直ちに百姓側からの上への抗議、或は諷刺とみるのは果して妥當であらうか。若しこれがそのまゝ、百姓側の意嚮を表はしてゐるとすれば、例へば集狂言に屢々みられるやうに、何故もつと平易な、口から出るまゝの言葉が使はれないのであらうか。かういふ風に言葉のあやが連なつて出來てゐるものが、果して百姓達に本當に身近なものとして理解出來たであらうか、疑なきを得ない。その點では「とくさ」

の場合も同樣である。[9] 又はじめ平易な言葉であつたものが、次第に言語遊戯風に書き改められたとは考へられないし、藝能の發生史的見地からいつても、やゝ唐突に過ぎる。この作は恐らくは、諷刺の内容を盛込んで百姓達の喝采を博する爲に下層より生れたものとみるよりは、かけ言葉のあやに打興じた「かうじ」や「くりやき」などに相通ずる、知的遊戯の作ではないかと思はれる。

問題になる農村の窮狀の表現にしても、切實な訴としては、餘りにも整ひ過ぎた概念的表現に過ぎないものであつて、そこには、追ひつめられた農民達の、人の心に泌み入る程の生々しい生活苦は全然感ぜられないではないか。やゝ唐突かも知れないが、いま試みに方向を變へて、三善清行の意見封事の一節である、

賦斂年增。傜役代倍。戸口月減。田畝日荒。[10]

などと比較してみれば、表面的相違を超えて、相通ずるものを感ぜしめないでは措かないであらう。かういふ、爲政者側からの農民に對する憐憫の情の表明は既に王朝以來のことであつて、決して中世に至つて始まるのではない。つまりこれは中世的といふより寧ろ、古代的といつた方が適當であるといへる程、陳腐な表現であるに過ぎない。この曲の作者もかういふ文を念頭に置いてゐたのではないか。丹念にこの種の文章を博搜するならば、恐らくこの原本に關するもう少しはつきりとした手掛りが見つけ得るのではなからうか。その意味で、筆者は表氏の論旨には遽に賛意を表するわけにはゆかないのである。[11]

以上、大名狂言から小名狂言への推移と、その質的變化を考察したのであるが、次章に於ては「ぶす」を中心に能狂言に取入れられた昔話の内容的變化と關聯させつゝ、大名狂言の變質に就て檢討してみよう。

註

(1) 「いもあらひ」、「わかな」、「西の宮參」、「鳥せんきやう」、「こけ松」、「竹松」、「田うへ」などがある。このうち「いもあらひ」と「わかな」とは虎明本にはあるが、他の三曲はどの傳本にもみることが出來ない。

(2) 例へば「今まいり」の最後で、大名が新參者の容姿を評し、新參者がこれに應じて相互に拍子にかかつて、

……ひたいこそは高けれ。　蜂額で候もの。　眉が又かゞうだ。　かぎ眉で候もの。　目こそはつぼけれ。　酢つぼ目で候へば。
鼻がまた大なハ。　高梁鼻で候もの。　口が又ひろいハ。　鰐口で候もの。　耳がまたうすいは。　猿の耳で候もの。　胸がまたさしでた。　鳩むねで候へハ。　腰こそはほそけれ。　蟻腰で候もの。　すねがほそう長いは。　蟀蟋脚で候へば。　おとがひがさし出た。　やり頤で候もの。　やり頤で候〳〵〳〵。（虎明本）

とやりとりするが、これを、本田安次氏が採集された天龍古能の三番叟で、拍子にかゝつた詞のうち、人が譽めた言葉としてうたはれてゐる一節である、

頭ヲ見レバ大頭、額ヲ見レバ鉢額、眼ヲ見レバ火ツボウ眼、鼻を見レバ龍王鼻、頬ヲ見レバ垂リン頬、口ヲ見レバ鰐口、腕ヲ見レバギンチョ腕、脛ヲ見レバトウノ脛トモ褒メサセ給フ。（「天龍流域の古能」（一）「能」昭26・3）

などと比較すれば、虎明本のものが矢張一種祝言詞風のものであることが知られる。

(3) 荒木良雄氏「能狂言の發生」（「文學」昭29・2）

(4) 大名といふ名稱の記載としては早い『新猿樂記』には「大名僧」とあるやうに、この語は元來武士に限るものではない。これは鎌倉室町期になつても變りなく、『太平記』の「護正院僧都猷全は、御門徒の中の大名にて……」（卷二）などとある通りであり、これは特に寺領では著しいことである。又大名はもと〳〵大名主の略であるが、『吾妻鑑』に「畠山殿。只大名許也。引レ橋構ニ城郭一事。不レ被ニ存知一歟。」（卷十六）や、同じく「鶴岳上下宮常灯油事、爲ニ大名等役一」（卷十五）でも分るやうに、政治的側面より寧ろ經濟的地位をいひ表はす面をもつてゐるのである。また清水三男氏は「中世に於ける播磨矢野庄」（「歴史と地理」三〇ノ三）の中で、寺田法念なる庄官のことに言及され、正和二年孫範長に與へた讓狀（大日本古文書東寺文書二。ヘ二七）からみて彼のやうに有力な名主は莊の事實上の支配者であり、又大僻宮別當神主祝師職といふ一種の神主でもあることを指摘されてゐるし、僧侶であ

ることは更に屢々みられるのである。從つて大名なる言葉の意味する領域は頗る廣汎なものであり、政治・經濟・宗教の各方面に亘つてゐるのである。

然し乍ら、平安後期以後、鎌倉・室町と諸種の史料に散見するこの語は直接農村と關係はあるにしても、大名の下人たる一般農民が直接口にすることの出來る言葉ではなく、もつと客觀的な立場に立つて始めていはるべきものであらう。この語が能狂言を除いて、民俗語の中には全然現はれないのも蓋し當然のことである。

そこで農村を地盤として發展した能狂言だけに、何故この「大名」が取入れられたかの事情をみると、類似の名前が豫め農村にあつて、それが大名に轉化したとは思はれないので、性格や立場の類似の點から大名に擬せられ得るものをみると、室町期に於ける宮座の年寄（大夫）に思ひ當るのである。

先に本文中に引用した天正本の「ゆ立」は既述のやうに既に現存せず、頗る古式を殘してゐるやうであるが、この內容は室町期に於ける宮座を中心とする神社の祭禮時の行事そのまゝで、はじめに登場する大明を座の代表としての年寄に置き換へてみることも出來るわけである。又「竹松」でも大明が出て、「神事のとうが當つた程に……」とあるし、「鬼松風」でも「神事ののふをせんとて……」とある。

肥後和男氏の『宮座の研究』によれば、年寄は座の主宰者であり、自らが同時に神主になることも多い爲、神主とも呼ばれる。（狂言の中で大名の代りに神主がはじめに登場する作例のあることは、既に指摘した通りである。）またの呼名イチワジョウ（イチバンジャウ）が一番尉とも一和尙とも書かれるところに、宮座に於ける武家社會の影響と、寺院に於ける組織が移されて宮座の名稱になつたことも考へうるのである。又年寄の服裝が烏帽子素襖であつたことも、武家社會との密接な關係を示唆してゐるやうであり、すくなくとも、そこに一種の武士的意識が流れてゐるのは否定し得ないだらう、といはれるのである。

「大名」の、能狂言への攝取過程を示す直接的史料がないので、勿論いま遽に斷定は出來ないが、以上の大名・年寄の比較の上からみて、大名といふ言葉が何等かの契機によつて、農民を母胎とする藝能の中に入り得る餘地のあることだけは明であらう。もと〈武家社會の中に生れ、やがてその身分表示として最高の名稱であつたといはれる尉といふやうな語が、長者の尊敬の意味をもつて宮座の年寄に名づけられたことなどを思へば、武家社會と農民社會との言語的交流は意外な程に密接なものがあつたものと

思はれる。さうして、かういふ考へが可能とすれば、はじめに大名は宗教的性格をもつ作中に現れてゐたことになり、舊くに遡れば、農民との對立や、彼等の諷刺はそれ程本質的なものであつたとはいはれないことになるのである。

(5) 但し狂言師の傳承にかゝる玄惠法師作と稱せられる五十九番の中に、既に「萩大名」はみられるが、この五十九番の成立が、傳承の通りとすれば、寛正五年糺河原の勸進申樂よりも早いことになり、しかもより新しい糺河原の上演曲名がかなり古名を留めてゐるのに拘らず、舊い方にみられる名前が後代のものとほぼ等しいという事などからみて、この傳承を信じる事は出來ない。

(6) 天正本では、

せうは獨、影はふたり、三せうの、夜るの車にせうをのせて、うしともおもはぬおせうかなや。

とある。

(7) 「ねこゐ」、「なるこ」、「なまぐさもの」、「文荷」、「どんごむさう」、「おひやし」、「くひか人か」の七曲がある。このうち、「なるこ」は狐塚に合併されてゐる。

(8) 表章氏「『天正狂言本』について」(前出)。

(9) この曲では、太郎冠者が信濃の名所舊蹟をみて來たので、見聞したことを大名が尋ねることになつてゐて、「……又其の原にてふしぎな事を見たとゆふ。人が獨其原をとをるとて、と草にてみなすりきえたとゆふ。おのれは何としてすれぬといふ。あとだからすれぬとゆふ。せうはら立る。と草かる其原山の麓より、みがかれ出る秋の夜の月。……」とあり、こゝでも歌にかける言葉のあやなどに興味の中心があるやうである。

(10) 『正續本朝文粹』(國書刊行會本)二七頁。また「大家小かとなる」について、方丈記にも「大家亡びて小家となる」とある。

(11) 註(7)に同じ。

三

既に早く世阿彌が、

狂言の役人の事。是又をかしの手だて、あるひはざしきしく、又は、むかしものがたりなどの、一けうある事を、本木にとりなして事をする、如此。（「習道書」七）

と述べてゐるやうに、能狂言と昔話との深いつながりは早くから認められてゐたが、昔話が狂言の中で如何に變化し、その變化がどの様な意味を有するか、といふことなどに就て、研究は未だ充分とはいへないし、又これまでは稍もすれば狂言に盛られてゐる話の筋を舊い文献の中から搜し出すといふ出自の研究のみに重點が置かれてゐたかにみえる。

例へば「附子」（天正本「ぶすさたう」）の出典として、その中の話に類似したものがあるといふだけで『沙石集』が擧げられてゐるが、單に出自の詮索のみでは兩者の關係を平面的に指示するだけであつて、それ以上のことは依然として不明のまゝに殘るのである。然も實のところ、その沙石集が果して「附子」の出典であるか否かさへも、さう簡單に決定出來ることではないのではないか。唯やゝ類似した說話が文献に記載されてゐるとすれば、それによつて、少なくともそれと同類の昔話、或は寧ろそれの原となつた昔話が、その記載時より以前から既に一般に流布してゐたことだけは確認されるわけであり、恐らく、早くから行はれてゐた昔話よりの刺戟によつて成立した說話群のうちのどれかゞ、偶然の機會を得て、書き留められたとみるべきであらう。さうして、その文献そのものといふよりは、尙依然として口承のまゝ流布してゐたと思はれる昔話の群のうちのどのものかゞ、「附子」に素材を提供したとみる方が自然であらう。

そこで先づ沙石集の說話を擧げ、それと同類の昔話の流布狀態を調べ、更にそれらと「附子」とを比較して、それが狂言に入れられる際に起つてゐる變化の性質をみることにしよう。沙石集の話は、

或山寺に、慳貪なる房主ありて、粘桶（あめ）を一つもちて、只一人ある小兒（こちご）にいささかもくはせずして、是は人のくへば死

ぬ物ぞとて、たゞ一人くひては、よくおきおきしけるを、此兒いかがして是をくはましと思ひて、房主他行のひまにたなに高くおきたるをとるほどに、髪にも小袖にもうちこぼしてつけたりけり。日比ほし〳〵と思ひけるまゝに、能々二、三盃くひて、房主の秘藏の水瓶を、雨だりの石に落してうちわりて、房主の歸りたる時、しくしくと泣く。何事ぞ、けしからずのなきやうやといへば、あさましき事の候。御水瓶をあやまちにうちわりて候時に、いかなる御勘當もやと思ひ候て、命いきてもよしなく覺えて、人のくへば、死ぬると仰せられ候物を、一盃たべ候へども死なれ候はず。二、三盃たべつれども死なれ候はず。髪にも小袖にもつけて、死なんとし候へども、すべて死なれ候はずといひてける。（卷第七ノ一六）

といふのであるが、これと同類の昔話は普通智慧のはたらきを示すものから次第に分化發展したものといはれ、多少笑話化してゐるが、その分布をみるとかなり廣範圍に亙り、『日本昔話名彙』によれば、福島、新潟、石川、長野、福岡の諸縣にまたがり、又恐らく時代は降るであらうが、所謂「和尚と小僧」物に一括される笑話の中に入るやうになれば、殆んど全國到る處に分布してゐるのである。[1] さうして沙石集のをも含めて、その内容を比較檢討してみると、和尚の好物が砂糖、あめ、金平糖、甘酒、酒などと所により種々變化してゐるし、又小僧は普通一人の場合が多いが、中には加賀江沼郡のものゝやうに、二人になつてゐる例などもあつて、決して一樣ではない。但しこのやうな細部に亙る小異同を除けば、これが和尚と小僧の間に起つてゐること、又大筋を變更させる程の新しい別の要素の混入などはどれにも殆んど見られない點では、いづれも一致してゐるのであつて、この話を昔から受繼いで聽いてきた人達は、和尚と小僧の話として親しみ、これを既に古びたものとはせず、從つてそこに新奇な要素の介入は不必要であつたものと思はれる。

つまりその滑稽さはよく庶民の趣向に合致し、彼等をひき付けてをく何物かゞあつたのであらう。

そしてその笑ひにしても、小僧が坊主を嘲笑したものとみるよりは、恐らくは、最後の場面でバツの惡さに直面して心中秘かに當惑してゐる坊主の姿が、心に映じて笑ひを引起してゐるやうであり、その場面に就ては、『續甲斐昔話集』に載せてある、

……和尙、小僧それァ大へんの事ォしたなァ、そんぢやァちやつと毒消しにお茶の一ぱいも飲めと云つた。

といふのなどが、この間の機微を最もよくとらへてゐて、恐らくは大いに笑ひを誘つたに違ひない。

ところで、能狂言は元來極めて制約された舞臺上で行はれる爲、先づ笑を起すに足る好題材の選擇こそ最も大切なことであるが、この場合、同じく古くから庶民の間に於て育てられ、生きつゞけて笑ひのポイントを巧にとらへて外さない昔話が、恰好の素材として取上げられるのはごく自然のことであらう。いま先に引用した沙石集の說話にみられるやうな話を受容れて、しかもそのまゝの筋を殆んど崩さずに狂言としてゐる天正本の「ぶすさたう」を擧げれば、

一、ばうず一人出て、二人よび出す。よ所へ行とてるすにおく。おくの間にぶすがある。あけて見てしするなとゆふ。もつともとてゐる。二人の者ふしんして見る。さたうをみなくう。さてゐさん天目打かふす。なひてゐる。ぼうず來て、これを見てたづぬる。せれふ。一口くへどもしなれず、二口くへどもしなれもせず、三口四口五口六口、十口斗ねぶりくへども、しなれぬ事こそ目出けれ。ひやうしとめ。

となつてゐて、說話や昔話と殆んど變るところがない。虎明、虎寬本では、兩本とも坊主が既に大名に取替へられてゐるが、こゝではそれすら昔話のまゝであり、その笑ひのねらひの中にも昔話と同じく諷刺らしい諷刺はみられない。ま

た終りの部分の、「一口くへども……」からは恐らくはフシがつき、それに伴つて二人の小僧はおどり出すものと推測されるが、ばつの悪かつた坊主もそれに救はれるかのやうにそのフシにつれて共におどり、自然に心がほぐされて和解がみられるのであらう。「ひやうしとめ」とあるのはそれを示したものに違ひないし、この留め具合は、脇狂言の「末廣がり」などとも相通ずるものがあるやうである。全體としてさして皮肉もなく、比較的後味のよい上品な笑ひで留めになつてゐるのもよく、小僧の智慧もさることながら、フシと共に心のしこりが解けてゆく點が面白い。

一體昔話で狂言に材料を提供してゐるものをみると、それが斷片的なものであれば、殆んど數へ切れない程もあり、しかもそれがはじめから斷片であつたか、或は次第に細分されたものであるかに就ては尙考究の餘地があるが、これに對し昔話の大筋が切斷されないで、ほゞ原形のまゝ狂言に仕組まれてゐるものは極く少く、「附子」をも含めてほんの數へる程度に過ぎない。そのうち、もう一つ、「蟹山伏」に觸れておかう。この曲のもとになる昔話の標準形ともいふべきものは埼玉縣川越のもので、

或偉い旅僧が山中で日が暮れた。見すぼらしい木樵小屋が見付かつたので行つて泊めてほしいといふと、斷られた。この先に化物が出るといふ古寺があると敎へられ其處に泊る。眞夜中になると何處からとも無くガタ〳〵音をさせて大入道が出て來て、自分の出す謎が解けなかつたら食つて了ふと云ふ。さうして、「小足八足、大足二足、色紅にして兩眼天に輝くこと日月の如し」と呶鳴つた。旅僧が蟹と答へて杖で大入道の頭をピシヤリと叩くと音をたてゝ引込んだきり朝まで何も出て來なかつた。夜があけて大入道の逃げた方を探してみると緣の下に大きな古蟹が一匹死んで居るのが見付かつた。それからこの寺には化物が出ない樣になつた。（『日本昔話名彙』一四二頁）

といふのである。この話しは川越以外には、ほゞ同じ形で石川、山梨、三重、熊本等の諸縣に亘つて分布してゐる。これは言葉の力によつて狐狸などを言ひ負かすといふ一聯の化物問答に屬するもので、蟹の難問を見事に解決したところに旅僧の勝利が誇示されると共に、當の蟹は敗北してやがて死に至るのである。(2)

ところで天正本では、この昔話の筋をほゞそのまゝの趣旨で受入れて、

一、旅人二人出て行が、日暮てだふにとまる。らんじやうにてばけ物出る。鬼來て、大そく二そく、小そく八そく、りやうがん天をさす、一こう地にふす時いかん。ゆかに。(3)たそ。からめんとて、さう方よりねりよる。さま〴〵のし舞。後二人のみゝをはさみて引入る。とめ。

となつてゐる。但しこれをみても分るやうに、旅人は問答に答へられない爲に、勝負に敗けて蟹の爲に耳を挾まれたまゝ引ずり込まれてゆき、一應昔話に比べて、主客の勝負が轉倒してはゐるが、問答の成否を中心にして考へれば、本筋は決して變化してはゐない。その置換は、「さま〴〵のし舞」によつて暗示されてゐるやうに、恐らくは古くから蟹の舞なるものがあつた爲、(4)狂言に仕組む際に勢ひ蟹を中心にする必要があつた爲に起つたのであらう。兎に角、昔話が庶民の立場を表はしてゐるとすれば、天正本に關する限り、それが狂言に取入れられるに當つても、在來の立場はそのまゝ踏襲されて變更は加へられてゐないのである。

ところが虎明本を始めとして、それ以後の傳本になると、登場人物や本筋等も昔話とは次第にかけ離れたものになり、また昔話成立の前提ともなつてゐる約束までもが無視されるに至るのである。例へば、「附子」に就てみても、既に虎明本では大名狂言に屬し、庶民に親しまれた和尚と小僧の代りに大名や太郎冠者が出ることに變つてゐるし、虎寛本で

は大名ではなく小名が現れるのである。これは一方からすれば大名狂言の固定以前のことを示すことにもならうが、大筋に變更のない所から、登場人物の交替をそれ程重大視する必要がないとは必ずしもいへないのではないか。昔話を支持してきた庶民の側からすれば、永らく和尚と小僧の話しとして親しまれてきたものが、狂言に入れられて、登場人物も變り、大名、太郎冠者といふ關係に置き換へられたのでは、次第に自分達のものとしての感じは失はれたに違ひない。その意味からすれば、この變更は決して輕々しく看過すべきことではないであらう。

又「蟹山伏」では、その中にある昔話の本筋が本質的に變更を加へられ、最早全く別個のものになつてゐる。元來この昔話では、難問に答へ得るか否かに興味がかゝるわけで、天正本ではその點未だ昔話そのまゝであるのに、虎明本では、僧侶が蟹の問ひに答へ得て勝利を收めたにも拘らず、負けた筈の蟹が更に續けて、「まことハかにのせいなるが、きやくそうのあまりに行力をまんじ給ふほどにぎやうりきのほどを見んためあらハれ出て候。」などと、ぬけ〳〵と生き永らへた上、敗北者らしからぬ態度で語り、終に天正本の場合と同じく、勝つた筈の僧が二人とも又も蟹に耳をはさまれたまゝ引ずり込まれるのである。つまり昔話の侵し難い約束も、虎明本以下では狂言の劇的內容を拘束する程の力はなく、從つて狂言作成者は昔話を單なる素材として、狂言本來の筋を發展させる爲に活用すればよかつた。虎明本以下に於ける山伏と蟹の化物問答などは、謂はゞ單に兩者の出合ひに際しての挨拶に過ぎない程輕いものとして扱はれ、その重點は、後に繰ひろげられる山伏の行力無効に對する嘲笑的態度の方に置き換へられてゐるのである。

次に、このやうな變化はいかにして起きたのであらうか。先にみた天正本の「ぶすざとう」は既に觸れたやうに、最後が囃子留になつてゐて、全體の筋の運びが大名狂言と或程度共通したものをもち、若し登場人物の差換へを行ひさへ

すれば、大名狂言としても充分通用し得るものである。それが實際に大名狂言に變化してゆく時期に就ては、勿論正確にこれを決め得ることは出來ないが、これは一方からすれば、先にみたやうに、大名狂言が祝言的要素を次第に棄てゝ、劇的に発展する傾向とも相応ずるであらうが、元來脇狂言と未分化の狀態にあつた大名狂言を分化獨立せしめ、更にその數を增し内容を多彩にし、豐富なものにしようとする意圖が生れるためには、少なくとも觀客層の變化を擧げなくてはなるまい。

既に世阿彌も、

ことば、風體にも、職なる事をなさずして、貴所上方さまの御耳にちかゝらんりこう。きやうだんをたしなむべし。返々、をかしなればとて、さのみに、いやしき言葉、風體、ゆめ〳〵あるべからず。心うべし。（「習道書」）

と述べてゐるし、又それよりやゝ降つて寛正五年（一四六四年）の糺河原勸進申樂に際して『蔭凉軒日錄』の記してゐるところは、

六十三間棧敷、公家・武家・騎馬、衣服改レ觀、皆日近來壯觀也。

とあるやうに、申樂見物の爲の公家、大名の偉容を記してゐるが、それは他方、

申樂七番過、而後御宴未レ終、見物者不レ得レ起レ座若干人、其數不レ可レ量、皆一言之下脫レ笠、是又畏二其威一也、山名金吾命二于田樂永阿彌一、使二諸人脫レ笠、而不二還御一以前、皆不レ起レ座、及二還御一而忽歸去、尤威之所レ服。

にも示されるやうに、元來勸進申樂は當然庶民をも對象としながら、彼等はこのやうな不自由さと、從屬的地位を甘受しなければならなかつたのである。つまり能狂言が次第に能樂の下流に立つにつれて、當時の上流との接觸も以前より

も多くなり、從つて將軍家を始めとする上流を意識外に置くことが出來なくなれば、その作風や內容も次第にこれまでの庶民風のものから離れてゆくのは最早止むを得ないことであつた。現行曲にみられるものは勿論、それと略同趣旨の大名狂言の成立も、かゝる情勢の中にあつて、下層より大名を諷刺するといふよりは寧ろ全く逆に、庶民の立場を次第に離れて、大名その他上流に或程度能狂言への親近感を與へる意味が多分に含まれてゐたのではないかとも推測されるのである。少くとも天正本に見られる限りに於ては、大名の面前に於て演ずることを憚る程諷刺の激しい作風のものは殆んど見出すことは出來ないのである。但し將軍家の地位が必ずしも安定せず、社會的にみて混亂と自由とが奇妙な混淆をなしてゐる室町時代と、封建制の鞏固に安定した江戸時代とでは同日に論じ得ないことはいふまでもないし、拘束と不自由はあるにしても、尙勸進申樂といふ公開の機會のあつた頃と、全く幕府の式樂化する江戸の能及び狂言とでは、作の幅やその包括しうる社會事象の容積量、或は階層的意識などに就て格段の相違があつたことも見逃し得ないであらう。要するに、能樂の室町將軍家採用が、その性格を全的に變更せしめる程の重大事であつたやうに、それは能狂言にとつても同じことであり、變質した狂言の展開される契機として極めて重大な意義をもつものと思ふのである。

かうみてくると、能狂言の主從關係の中にみられる諷刺などは、その多くのものが恐らくは成立期のものとはかなり違つたものであり、或は焦點のぼけたものともなつてゐて、初期の、主從關係を肯定した上で起る健康な笑ひは後になる程意地惡いものともなり、或は無理に作られた笑ひに變つてゐるやうである。小名狂言など、後のものになればなる程、一見下からの諷刺が最も强いやうにみえても、恐らくは下層とは切離されて全く無關係に生じたものであり、[5] その多

くは虎寛本などに至つて始めてみられるものであつて、笑ひの本筋から外れた改悪とみるべきであらう。虎寛本に於ける小名狂言「附子」などに對して、封建制下の大名達は盛な喝采を送ることも出來たであらうが、一般庶民にとつては、それは最早無關係の世界のものであつたに違ひない。つまりその笑ひは、如何にすれば相手を陷れることが出來るかに腐心してゐる世界を反映して、一種の悪夢にも譬へうべき笑ひであるに過ぎない。また大名の世界にしきりに出沒し、寧ろその間の主役をすら演じてゐる太郎冠者など、滑稽、厚顔、間抜け、狡猾などといふ烙印を押され、それが又反面、彼を庶民に親しまれ易い存在にしてはゐるが、これ亦、從來考へられてゐるほどには、決して庶民の好ましい典型ではなく、寧ろ抑壓された時代の拗れた人間像の典型とみてよいものが多いのである。從つて、好んで使用される太郎冠者階級、或は諷刺の主體としての下層なども、初期狂言成立期を考慮に入れても尙、果してさう呼ぶに相應はしい藝能的地盤が實際に存在してゐたか否か、疑はざるを得ないのである。

註

（1）　中田千畝氏『和尙と小僧』參照。

（2）　言葉のもつ力によつて相手を打負かす昔話の類例は非常に多い。その相手は、古狸、狐、或は大山の芋などの化物などにも及び、問答或は言合ひに負けた方が死ぬのが普通であつて、虎寛本の「蟹山伏」は明にこの昔話の約束を無視してゐる。さうして言合ひの言葉の中にある、

「醫者どんの頭をステテンコテン」

「お前の頭はすつぺらぽんぢや〳〵」

「千も萬もボックリショ」（『日本昔話名彙』所收）

などといふのをみれば、かういふ一聯の化物問答にはかなり古い頃の俤が殘されてゐることがわかる。

(3) この「〻かに」の句をどうとるか、やゝ疑問がないでもないが、問答の本文とはみなさずに、その答へは蟹なのだとの註釈的な指示詞とみてよいと思ふ。つまり蟹の質問に對して、結局答へが出來なかつたわけである。尙この句に關しては、表章氏よりの御教示を得たことを深謝する。

(4) 天正本では、目次に曲名だけが記載されてゐて、本文を缺いてゐるものが四九曲ある。それは飛び〳〵にでなくて、或る個所が纏つて缺けてゐる所からみて、その部分だけ缺落したのであらう。その中には、「松の舞」、「花の舞」、「竹の子舞」、「鵜舞」、「田にし舞」、「さぎ舞」、「かに舞」など、舞を中心とすると思はれる曲があるので、天正本「かにのばけ物」の中、「さま〻〳〵のし舞」も、かうした類の舞を意味するのではなからうか。尙これらのうち、「松の舞」、「菊の舞」、「引たる舞」、「鷺の舞」は大藏虎明本の「萬集類」の中に載せられてゐる。本田安次氏によれば(「風流に伴う狂言」「能」六ノ五・六)、新潟縣鵜川村に殘る綾子舞の中に矢張同じく「蟹の舞」があり、その詞章が殘つてゐるとのことである。

(5) これを「ぶす」に就て具體的に述べれば、天正本では坊主と小僧とが出て、最後に「……しなれぬ事こそ目出たけれ。」で拍子留になつてゐるが、虎明本では大名が出てのさ者(太郎冠者)を呼出し、その留めは、「〳〵一口くへどもしなれもせず 〳〵二口くへどもまだしなず 〳〵三口四口、〳〵五口 〳〵十口あまり、 〳〵みなになるまでくふたれども しなれぬことのめでたさよ、あらかしらかたや候、 〳〵言語道斷の事、あちらへうせおれ。」といふのであつて、單に天正本の出家ものが大名狂言に置換へられただけではなく、留めがやゝ違つてゐる。これは未だ推測に過ぎないが、類似曲の動きの同一傾向であることからみて、恐らくは虎明本の曲の形體になる手前に於て、「するひろがり」や「目近」と同じ開展段階が曾て存在したものであらう。然し內容に較べてその留めがやゝ單純であるために、これを劇的に一歩前進させれば、更に虎明本に迄進み得るわけで、こゝでは留めが「……めでたさよ。」で終らず更に、「あらかしらかたや候。」と續いてゐる。この語の意味は元來壯健の意であるから、謂はゞ、貴方のおつしやる毒を飲んだのですが、ちつとも死にません。どうしたものなのでせうかと、恐らくは死なぬ事を充分承知の上で、大名に對して皮肉を飛ばしてゐるのであつて、天正本などにも未だ殘つてゐる、和解を誘ふ囃子に含まれる祝言詞的魔力が認められなくなれば、あとは觀客の興味に應じて、その筋は次々と新しい展開をみせるのは當然であつて、虎明本に於ける大名狂言はその一過程を示すものとみてよいであらう。つまり大名狂言が新しい內容をもつて成立するまでは、種々の社會事情も考慮に入れられなくてはならないが、

それ以後では、大名に對する下からの諷刺などとは無關係に、たゞ筋の發展――或は墮落でもある――がみられるだけであつた。從つて、虎寛本では小名狂言となり、「（主）何のかしらかた。あのわうちやく者、どれへ行ぞ。捕らへて呉い。やるまいぞ〳〵。（シテ・次郎冠者）ア、、ゆるされい〳〵。」と變つてくるのも、當然豫測される筋道なのである。

（昭和卅一年十月十九日稿）

活字本『天變地異』

小幡篤次郎は、福澤の良き女房役をつとめ、今日の慶應義塾を築き上げた人物であり、其の著書としては、『博物新編補遺』『英氏經濟論』『生產道案內』等と共に、此處に述べんとする『天變地異』がある。

此書は、慶應戊辰年八月慶應義塾同社識とある序二丁、凡例一丁、目錄一丁、本文二七丁計三一丁よりなる四六版の木版本で、表紙は、網目地模樣黑色表紙、鼠色縞目に慶應義塾藏版の文字入表紙、及び茶・鼠色縞目表紙の三種類があり、序文、凡例にやゝ相違があるが、本文は大體變化ない樣に見受られる。

表紙見返しによると、慶應四年初秋とあり、序が八月になつている點より、慶應四年八月頃に、慶應義塾出版物として發刊されたものであらうと思はれるが、表紙が三種も存する點より、相當版を重ね、少くとも、西洋事情の表紙の變化と比較してみて、明治七、八年頃迄版を重ねたのではないかと思はれる。

從來はこの木版本のみが考へられていたが、今回入手したのは、僅に木版本より大きく、貝模樣の地模樣のある茶色表紙に、見返しの繪入刊記、序、凡例を缺き、見返しに目錄を置き、本文二十三丁よりなる活字本である。本書は挿繪を全く缺き、字配も、木版本が十九行二十字詰であり、總ルビつきであるのに對し、活字本は十九行二一字詰であり、表紙題簽は、共に木版で『天變地異全』とあるが、木版本が全の字が下に置かれ、相當題簽が長いのに對し、活字本は空白少く、題簽が短くなつている。

此の活字本は刊記なく、その出版年月も不明である。また或は僞書とも考へられないことはないが、僞書を作る程の賣行を見たとは思はれず、今迄我々の目に觸れなかつた點をみると發行部數も餘り多くないものの樣に思はれる。

（河北展生）